## 二―一　秀英舎の誕生とその命名者

大日本印刷株式会社の源流はおおきくはふたつある。

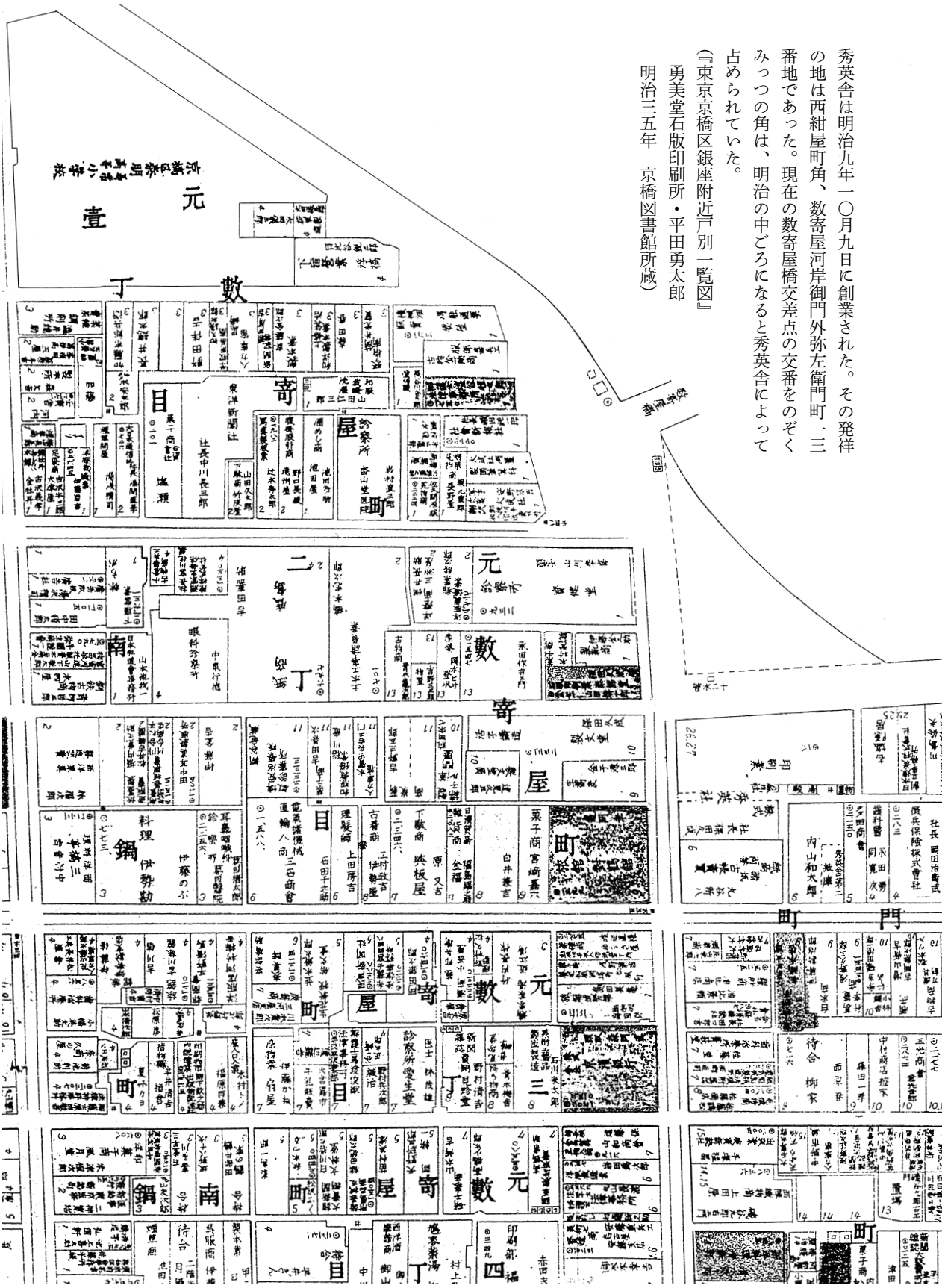
そのひとつは一八七六年（明治九）一〇月九日創業、一八九四年（明治二七）一月一三日設立の株式会社秀英舎である。もうひとつは一九〇七年（明治四〇）四月四日創立、九月一日開業の日清印刷株式会社である。このふたつの会社が一九三五年（昭和一〇）二月二六日に合併して、大日本印刷株式会社が誕生したのである。

秀英体と呼ばれる活字書風を確立したのはおもには秀英舎であった。秀英舎の発祥の地は京橋区西紺屋町角（数寄屋河岸御門外弥左衛門町一三番地）である。その創業の場所は現在の中央区の晴海通りに面しており、数寄屋橋交番の前にあたる。もちろん晴海通りは当時の道幅ではなくて拡幅されているが、数寄屋橋の交差点に立つと秀英舎の創業時代のおおよその立地がわかる。すなわち交番の前、不二屋洋菓子店・みずほ銀行（旧富士銀行）のあたりが秀英舎の本舎・活字版印刷工場の所在地で、銀座四丁目に向かってソニービルのあたりが秀英舎の石版印刷部門（オフセット平版印刷部門につらなった）の泰錦堂、野村証券のあたりが金属活字・電鋳版製造部門の製文堂であった。

創業時の陣容は、事務員五名、工員二一名のあわせて二六名であった。その設備のほとんどは東京第一大区八小区山城町（いまの泰明小学校のあたり）にあった高橋活版所の設備一切を一千円で購入したものであった。

左図
江戸末期の数寄屋橋界隈。秀英舎は山下御門前・山城町河岸にあった高橋活版所の設備を購入して西紺屋町角において創業し、のちに山下町にあった活字鋳造工場を買収して製文堂として自社の活字鋳造設備をあわせて元数寄屋町に移転した。
『分間江戸大絵図』
（須原屋茂兵衛版　安政六年）

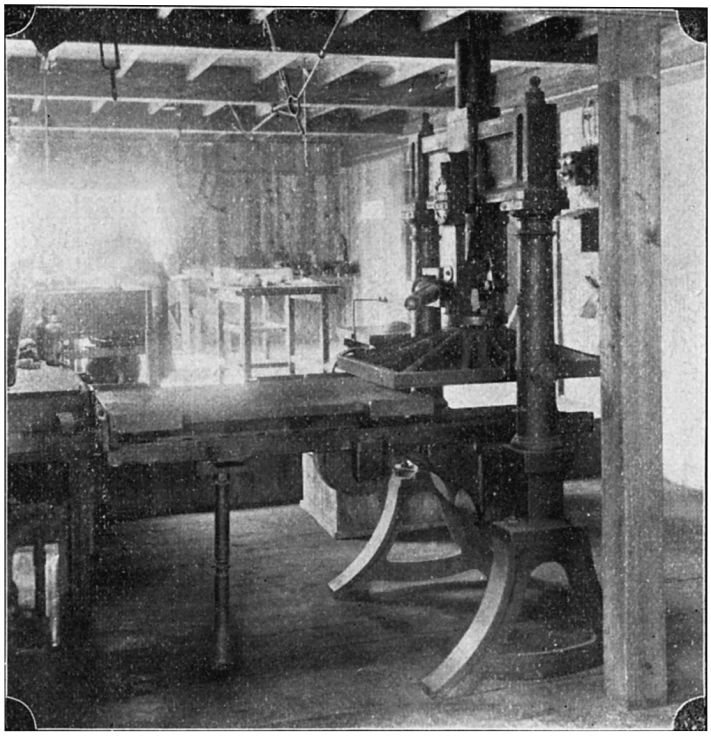
御城
西御丸
松平大膳
御用屋敷
馬場先御門
和田倉御門
鍛冶橋御門
呉服橋御門



秀英舎は明治九年一〇月九日に創業された。その発祥の地は西紺屋町角、数寄屋河岸御門外弥左衛門町一三番地であった。現在の数寄屋橋交差点の交番をのぞくみっつの角は、明治の中ごろになると秀英舎によって占められていた。

（『東京京橋区銀座附近戸別一覧図』
勇美堂石版印刷所・平田勇太郎
明治三五年　京橋図書館所蔵）

このとき買収した活字類と印刷機の詳細に関しては明確に知ることはできない。わずかな記録では、創業当初の秀英舎の工場には、明朝体活字の、四号、五号サイズが若干あった。また四六判一六ページ掛手引き印刷機（おおむねＢ２判の活字版印刷機）一台、四六判八ページ掛手引き印刷機（おおむねＢ３判の活字版印刷機）一台、半紙判掛手引き印刷機（おおむねＢ４判の活字版印刷機）一台があったとされる。



創業者は四名でスタートしたが、そのひとりの佐久間貞一（一八四八―九八）は江戸下谷南稲荷町に生まれた。幼名を千三郎といい、のちあらためて貞一とした。佐久間家は代々武蔵国葛飾郡当代村の名主だった。父・甚右衛門の代になって、小禄ながら御賄方の家格を買い取って幕臣となった。佐久間貞一は維新の戦争に際しては、彰義隊隊士として上野戦争に参加したほどの侠気さかんな若者であり、またほろびさった徳川幕府の

上図は『株式会社秀英舎沿革誌』（明治四〇年三月二〇日）の口絵に紹介された写真図版。石版印刷による不鮮明な写真であるが、この印刷機が創業の際の記念すべき手引き式印刷機でありイギリス製であったとしている。社名の命名の由来とあわせても興味ぶかい。頭部の形状からみてアルビオン・プレスかと思われる。一八九七年（明治三〇）の時点ではまだ秀英舎で使用もされていたとする。秀英舎はこののち一九一〇年（明治四三）四月二五日に失火炎上している。また関東大地震の罹災も激甚をきわめたので、そのいずれかのときに消滅したと推測される。なおアルビオン・プレスの小型機はミズノ・プリンティング・ミュージアムなどに展示されている。

幕臣であったとの自意識が長らくつよかった。

創業にあたって社名となった「秀英」は創業時の出資者のひとり保田久成（英・漢学者でのち佐久間貞一の義兄となる。佐久間貞一の没後は秀英舎第二代舎長　一八三六―一九〇四）の命名で、当時の世界きっての大国・イギリスを超えて秀でるとの意が託されたとされている。

その命名を得た佐久間貞一は、かねてからの知己で、旧幕臣として新政府内の出世頭となった参議兼海軍卿・勝海舟（安房　一八二三―九九）に看板の揮毫を依頼した。勝海舟は早速筆をとって「秀英舎」と題して佐久間貞一に与えた。秀英舎の社名はこのようにして生まれ、その活字書風としての秀英体の名称につらなったのである。

勝海舟（一八二三―九九）

## 二―二　新聞の印刷からはじまった秀英舎の歴史

明治維新ののちしばらく、佐久間貞一は元彰義隊隊士として維新勢力から追捕の身となった。そのために東京を逐電した佐久間貞一はあちこちを逃げ歩き、やがて徳川家達による徳川家領とされた静岡にいたり、沼津兵学校掛川支寮に学んだ。そしてついにはとおく鹿児島に両三年留学したと自ら語っている。

その後一八七一年（明治四）七月一四日に廃藩置県が施行されて、次第に旧幕臣への追捕の手もゆるんだ。翌年佐久間貞一は旧徳川幕府直轄領であった九州・天草に渡り、その地の二〇戸

ほどの民衆を北海道の日高国浦河郡に移住させることに奔走した。ほかにも北海道時代の佐久間貞一は、朋友とふたりで函館に店舗を構えたとされるがその詳細はわからない。

さて維新政府は、成立直後の一八六八年（明治元）三月、「諸事御一新・祭政一致」を打ち出し、神仏分離令を公布して廃仏毀釈を推し進めた。翌年七月には神祇官を設けて太政官の上に置いた。神祇官は皇室の祭祀をつかさどるとともに、全国の神社・神官を支配下においた。

さらに一八七〇年（明治三）一月三日、神道の国教化をもくろむ政府は大教宣布の詔を発した。この大教とはすなわち神道のことであった。このころは神道・仏教・儒教が習合したものを一般に神道と呼んでいたので、それと区別するために大仰に大教と呼んだものである。

佐久間貞一

この時期の神道国教化政策は、おもには尊皇攘夷をとなえて維新に参画した平田派の国学者によって推進された。しかしながら近代化政策の推進や文明開化の気運によってこうした頑迷な国学者への反発がつよまり、神祇官は神祇省、教部省と次第に格下げされていった。そしてついに一八七二年（明治五）以後

**秀英体研究　サンプルPDF**

**『秀英体研究』についてのお問い合わせ**

大日本印刷株式会社
C&I事業部IT開発本部　秀英体プロジェクト（担当：伊藤・佐々木）

E－Mail ： shueitai@lab. cio. dnp. co. jp
tel ： 03－5269－5657
fax ： 03－5269－6023

© Jiro Katashio 2004